

おりたに くみこ  
折谷 久美子さん NPO法人スプリングボードユニティ21 理事長

1959年生まれ、函館市出身。小学6年から生け花を習い、お茶、着付けなどの資格を持つ。函館遺愛女子高時代には、山岳部のリーダーを経験。1987年に結婚。夫の泉さんが仲間と楽しそうに活動をしている姿から、まちづくりに目覚める。



## 地元愛に満ちたまちづくり活動でおもてなし

### きっかけ

市民、特に女性が気軽にまちづくりに参加できる会があればと1999年に函館港まつりのいか踊りに総勢100人で出場したのが始まりです。会の名称は、目標に向かって進むきっかけとなる跳び箱の跳躍板「スプリングボード」、さまざまな人や団体がまとまる「ユニティ」に、次世代を表す「21」を付けました。年々仲間は増えてきましたが、寄付に頼っていた活動費は減るばかり。そんな転換期に花をテーマにしたシンポジウムを実施、行政の目にとまり、2004年から国道5号函館新道沿線で春から秋はお花、冬はキャンドルの灯りでおもてなしをしています。

### 苦労

国道沿いでの活動なので、大勢の目に留まります。当初春から秋までの5か月、きれいな状態を維持できるかが、とても不安でした。水やりや肥料散布、雑草取り…。1日や2日で終わらず「花をきれいに咲かせる前に人間の方が枯れてしまう」との声も耳にし、会議を開きました。農家の方からビニール製の素材で土を覆う「マルチシート」を提案され、試してみると効果てきめん。それからは困ったことに直面した時、意見を出し合い議論しています。「まずはやってみよう」の精神で実践し、無理なく維持できる体制が整いました。懐かしい思い出です。

### 満足度

皆さんの笑顔に会えるのがうれしくて、活動するたびに元気をいただいています。函館新道や道道函館空港線の植栽活動、冬の夜を手づくりキャンドルで彩る「シーニックdeナイト」など、さまざまな方との出会いが新たな活動のきっかけにもなりました。今では毎年6月の花植えには800人ほどが参加し、焼きそばが振る舞われるなどまるでお祭りようです。花は景色を明るくするだけでなく、見る方にも世話をする方にも笑顔を届け、癒してくれることを学びました。花がもたらしてくれた“ご縁”を大切に、心の中にも花を咲かし続けていきたいです。

### これから

毎年、沿線の小中高校生が参加してくれる函館新道の活動は12年目です。1回目に参加した小学1年生は、高校3年生になり、進学や就職で地元を離れている方も大勢いると思います。帰省したとき、花いっぱい風景を見て、「ああ、まだ続いているな」と懐かしい気持ちになってくれたり、みんなで踊ったいか踊りや、牛乳パックを転がしてキャンドルを作ったことなど、仲間との思い出を、このまちで作り続けたい。そして「函館っていいまちだなあ」と思ってくれる方が1人でも多く増えてくれることを期待しながら、地域一体で活動します。

北の★女性たちへの  
メッセージ

厳しい冬を体験し、乗り越えるからこそ、春の訪れを待ち遠しく、ありがたく感じるのだと思います。頑張った先には、みんなの笑顔が待っています。北に住む女性の芯の強さとしなやかさを持って、楽しく元気に活動が続くよう力を合わせていきたいですね。

## 渡島【函館市】

さかぐち 阪口 あき子<sup>こ</sup>さん 株式会社シンプルウェイ 代表取締役

1973年生まれ、静岡県出身。静岡県立国際関係学部卒。29歳の時、結婚を機に移住した函館市で起業した。8mmフィルム工房、イカール星人関連事業、函館市公式観光情報サイトの運営などを手掛ける。



2015年、会社設立12周年祝いの席でスタッフとともに撮影



## 自分を生かすために選んだ「起業」の道

### きっかけ

大学時代、就職活動をするにあたり、自己分析と理想の人生について検討しました。自分の持ち味は「リーダーシップ」「行動力」「発想力」。しかし、多くの会社が女性に求めるのは、男性のサポート役です。既存の組織では生きづらいことを察し、30歳までに起業すると決意しました。社長になれば、配属や昇進での男女差別とは無縁で、育児と仕事との両立も可能だと考えたのです。あれから20年がたち、残念ながらその差別がまだ残ることを憂慮しています。変わるべきは、男性、組織、そして日本人の働き方だと思います。

### 苦労

起業の修行と位置付け、ベンチャー企業に就職。7年間働きました。ハードワークでしたが、営業先でさまざまな事例を問の当たりしながら、ビジネスプランを練るのは楽しかったですね。その後、移住先の函館市で起業しましたが、いざやってみると、サービス内容やPR方法、経理…。思い通りにいかないことだらけで、2年間は1日も休まず、目の前の穴を埋め続ける感じでした。ようやく立ち上がったのが、個人の思い出映像をよみがえらせる「8mmフィルム工房」。注文メールがずらっと並んだ日の感動は忘れられません。

### 満足度

8mmフィルム工房の成功で会社を軌道にのせた後、函館市からYouTube用観光CMの制作を受託。その仕事で誕生させたのが、ご当地キャラクター「イカール星人」です。Web累計再生180万回を超えるヒットとなり、2014年には函館朝市に公式ショップ「イカール星神社」を開業しました。私が今、自由に楽しく仕事ができているのは、メンターであり、あらゆる面でサポートしてくれる夫のおかげです。男性でありながら1年間の育児休暇を取るなど、仕事と同等に家庭を大切にしてくれる人と結婚できて幸せです。

### これから

50歳で海外移住、という夫婦共通の目標があり、それまであと7年。今までの経験や人脈を生かして、函館でもう一つ何か新しい事業を立ち上げたいです。同時に、10歳の息子はもうしばらくは親を必要としていますので、子育ての時間を楽しみたいです。海外に移住した後も、日本人の感性を生かしたビジネスをしたいと考えています。自分にも、世の中にも、いろんな可能性が満ちあふれていると感じます。これからが楽しみです。

北の★女性たちへの  
メッセージ

1人で頑張りすぎず、周りの人に上手に頼りましょう。また、女性の場合、所属する組織や、お客様との相性が大事だと思います。男尊女卑に正面から挑むのではなく、性差関係なく評価してくれる方を相手に実績を積んで、自分の評価をうまく上げていきましょう。

## 渡島【八雲町】

しばた せつこ  
柴田 節子さん 八雲町野菜グループ連絡協議会 代表

1951年生まれ、八雲町出身。25歳で結婚し、柴田農園へ。早くから家族間で経営協定を結び認定農家で、昨年末、長男へ経営移譲。メインは水稲と軟白長ネギ。日本では珍しい西洋ねぎ「リーキ」は、高品質でレストランからの引き合いが多い。



## 育てること、食べさせることが大好き！

## きっかけ

嫁いだ頃の柴田農園は、うるち米と若牛育成を主にやっていたのですが、その後、減反政策で、軟白長ネギを始めました。最初は、趣味で空いてる畑で野菜を作っていたのですが、今は、軟白長ネギのハウスのうち3棟を利用し、野菜を作っています。ハウス利用なので、一年中野菜を作れるのが特徴で、「新ジャガ」は毎年6月20日ごろの収穫です。野菜を売ようになったのは、ふとしたことで私の作ったセロリが地元スーパーの青果担当の目にとまり、そこで売ってもらえるようになってからです。セロリが、私が野菜作りにとっぴりはまるきっかけですね。

## 苦勞

一番上の子どもが6歳だった頃、祖母と両親が病気で倒れ、未熟児で生まれた一番下の子どもと、一遍に4人の世話をしなくては行けない時がありました。病人の世話が一段落した時から野菜を育て始め、「節子の野菜」として地元や、宅配で売り始めました。周りからは、「変わったことやっているな」と思われていたようですが、夫は「やり通せ」という人で、夫の理解と子どもたちの協力があり、続けることができました。「くどく（愚痴を言う）」のは好きじゃないですし、今、目の前の出来ることをしてきたので、苦勞とは感じていません。

## 満足度

自分たちが作った野菜の販売先があるというのは、とてもありがたい。100パーセント満足です。野菜は、八雲商工会で毎年5月から11月に月2回開いている「ハピア産直市」で販売し、ハーベスター八雲へは開店当初から納入しています。2010年からは、地元の学校給食でも採用されています。品質を保ちながら、品数や求められる納入量を満たすことは大変な部分もありますが、「おいしい野菜を食べさせたい」という思いで続けています。食育の一環で、学校で子どもたちに八雲の野菜の話をした時は、子どもたちの野菜を見る目が違ってくるのを感じました。

## これから

道筋がついたので、現在やっていることを続けていきたいですね。私は、なんでもやりたいんです。ハウスでは、一年中野菜が採れますが、これがとても楽しい。種をまくのが大好き、人に食べさせるのが大好き。そうしていると、同じような人が集まってきます。八雲町野菜グループ連絡協議会は、1990年に地元の3つのグループがまとまり発足しましたが、やっぱり若い方に入ってほしいですね。男の人の理解がないとできないから、納得させるには、やはりそこは「数字」。野菜が経営の一部となることを見せることが大切な。

北の★女性たちへの  
メッセージ

やりたいことがあるなら大いにやってみるといい。挑戦して失敗しても自分が満足すれば、それでいい。幸せの基準は他人からの評価じゃなく自分の気持ち。成功したら、それはそれでいいし、失敗したら、また次があります！

## 渡島【松前町】

すぎもと なつこ  
杉本 夏子さん 津軽海峡マグロ女子会 北海道側リーダー

1973年生まれ、松前町出身。松前町の「温泉旅館矢野」の3代目若女将。松前町産の本マグロや天然の蝦夷アワビを食材とした料理が人気メニュー。10歳になる一人娘について「旅館を継いでとは言っていませんが将来は娘と一緒にやっていきたいですね」



## 力強く泳ぎ続けるマグロのように、女子力で地域を元気に

### きっかけ

祖母、母、そして私と3代続けて旅館の娘として松前町で育ちました。10年ほど前に札幌市から戻り、娘を出産しました。旅館の若女将となり、このまちを見ると、おいしい食材など、多くの魅力にあふれています。でも知名度は低い。「この魅力をもっと発信したいな」と思っていた時、海を挟んだ青森県の女性、そして道南の女性達に出会いました。「道南と青森県は津軽海峡を挟んだマグロの名産地。じゃあマグロ女子会を作り、両地域の魅力を発信しよう!」と話が進み、2014年3月に立ち上げました。

### 苦勞

松前町は、漁業が重要な産業です。漁業と、経済効果の裾野が広い観光を結びことが課題です。漁業から見た観光の活用と、観光から見た漁業のつながりを、より良い形で結びつけたいと思います。身近すぎて見失いがちですが、地元の私たちが普段から美味しいと食べている素材が実は地域の突出した持ち味です。それをどう表現するかが「おもてなし」を演出する旅館業の役割であり、道南の各地域の魅力を発信し、つなげていくことができれば、と思っています。

### 満足度

メンバーは、さまざまな業種の20歳代から60歳代の約70人で、現在もマグロ女子=マグ女(マグジョ)は「増殖中」です。これまでに両地域の魅力発信ツアーなどを実行してきました。2016年3月には北海道新幹線が開業します。でも、開業だけで地域は元気になりません。地域の資源を活かした地元ならではの商品化が大切だと思います。女性ならではのシンプルな思考回路と、マグロのようにたくましく泳ぎ続ける行動力で、魅力的なおもてなしを提供するぞ!という熱意にあふれています。

### これから

今、全力を尽くし、歳を重ねた時に「このまちで生まれ、そして暮らして本当に良かったな」と静かに思える人生でありたいと願うだけです。成果や結果は、誰からも評価されることではありません。自分の人生なのだから、自分自身で決めることです。マグ女は「マグロ」ですから、満足して振り返ったらだめなんです。常に前を見ながら泳ぎ続けていないと死んでしまいますから。愛する松前町を基地に、これからも多くの仲間とともに泳ぎ続けていきたいですね。

### 北の★女性たちへのメッセージ

今やっていることに壁を感じたときは「同じ想いを持った同志は必ずいる」と思って下さい。そうして出会った人は、壁に当たったからこそ出会えた貴重な仲間です。自立して自発的に行動し、強い意志を持った人がつながれば、大きなエネルギーになります。

## 檜山【江差町】

こうめ ひろこ  
小梅 洋子さん かあちゃん食堂たまりば 店主

1942年生まれ、上ノ国町出身。結婚して江差町へ。夫の酒屋を手伝いながら、義母と一緒に暮らしてきた。特技は江差追分。2009年に江差追分熟年全国大会で優勝するほど。2012年から愛宕町内会の会長に就任し、2015年7月からは町議会議員も務める。



## 自然体の応対でご近所との和、お客と境目がないお店に

### きっかけ

長く民生委員をやっていて、テレビで老人の孤独死を聞かされたときに、ご近所の方が顔を合わせる食堂のような、自然と見守りができる環境があればいいなあと思っていました。江差町も1人暮らしの高齢者が増えたなと思っていた頃、北海道が町会所で開いた女性起業塾に参加し、開店する決心ができました。1人では何もできないけど、まず1人が動いてみないと何も始まりません。複雑な手続きや融資の仕方も親切に教えてもらい、皆さんに手助けされて、2005年にお店を開きました。

### 苦労

最初のご近所さんが数人来てくれたら、と始めましたが段々と人が増えてきました。ありがたいことですが、以前なら、お客さんがゆったりと畳に寝転んでくつろげる感じでした。もう少しゆっくりとした時間を過ごしてもらえるお店にしたいですね。始めた頃はお茶を飲む場所くらいの考えでしたが、「自宅では食事の支度が大変」と聞いて、それなら1日だけでも、と思って食事に力を入れました。「来週は何にしよう」と考えても、皆さんからの差し入れが多くて、考えた通りの献立になったことがありません(笑)。みんなで作っている食堂ですね。

### 満足度

おかげさまで笑顔が絶えず、にぎやかな店になりました。見知らぬ方向士が話したり、隣の方にお茶をついだりと。お店に言葉が途切れる時間はなくて、聞いているだけで、ご近所の色んなことが分かります。家に1人でいるとテレビが世界のニュースを伝えてくれますが、お向かいのことまでは分かりません。十分なおもてなしはできませんが、この食堂に来ると「ほっとする」と皆さん言ってくれます。ありがたいですね。週1日の開店ですが、お客様からは「今日はちょっとおしゃれて店に」と思っていたら、気持ちの張りが違いますね。

### これから

70歳を超え、お年寄りの気持ちも分かる年代になりました。これからも理解できることが、まだまだたくさんあると思うと楽しいですね。無理をしたら続かないですし、大儀(面倒)だと思ったらお店もできません。自分たちが楽しいからできることです。年若い子どもの元に引き取られても帰ってくる方も多くて、できるだけ住み慣れた所に住むのが一番だと思います。そんな場所を守っていききたい。だから、いつまでも元気でいたいと思います。皆さんのおかげでいつもおなかいっぱい笑って暮らしているので、毎年どんどん元気になっています。

### 北の★女性たちへの メッセージ

やってやるぞと気負うことよりも、自分が一番楽しいことを笑ってやるのが一番ではないでしょうか。楽しいことしかやらないのではなく、何をやるにも楽しいことにしちゃう。嫌なことでも楽しいことにするいい加減さ、いいあんばいが継続のこつ。自然のままに笑って生きましょう。

## マザーズ・ぽけっと ～図書ボランティア団体～

2003年に、旧今金幼稚園の絵本整理にボランティアとして参加した主婦が、絵本などの読みきかせグループとして結成。現在のメンバーは11人。グループ名は、母親のエプロンのポケットの中に、楽しいお話が一杯詰まっている、とのイメージで付けた。町を歩くと「ぽけっとおばさん」と声をかけられるそう。



## 「ぽけっとおばさん」が優しく語りかける

## きっかけ

2003年に旧今金幼稚園の「えほんの部屋」で、絵本整理のボランティアをしていました。作業が終わったとき、みんなで「絵本を通じて何かお手伝いをしたいね」と話していたところ、当時の園長先生から「絵本の読みきかせをしませんか」と声がかかり、喜んで引き受けスタートしました。現在のメンバーは11人。年齢層は20代から60代と幅広く、今金小学校の先生もメンバーです。先生からは「学校以外で子どもや親とふれあうことは教師として貴重な経験です。今金町の町民として少しでもお手伝いができれば、と思い参加しました」と言ってくれます。

## 苦勞

スタートしたころは、未経験のことだったのでメンバーみんなが緊張しました。今では、子ども園や小学校などの定期読み聞かせのほか、イベントにも参加し、準備や打ち合わせなど、ほぼ1年を通して活動があります。メンバーは仕事や家事、育児などさまざまで、全員がそろうことはめったにありません。でも、やりたいことを無理のない範囲で、というのが活動の基本です。パソコンや演奏、縫製や工作など、その人が得意な分野を担当し、協同で作業を進めたことが長続きの理由かもしれませんね。

## 満足度

週3回程度、幼稚園や小学校で、既製本の他にオリジナルの絵本や大型しかけ絵本など、喜ぶ子どもの顔を想像しながら製作し読み聞かせをしています。読みきかせを始めると、黙って見ていた子どもが、やがて身を乗り出し目をきらきら輝かせ、笑ったり驚いたりする表情を見ると、「やったー」と嬉しくなります。読みきかせの対象は、赤ちゃんから高齢者の方まで広がっています。2011年には高橋はるみ知事も見学に来てくれました。「なまちじ(生知事)だー」と子どもたちは大喜び。知事には飛び入り参加で「牛」の大役を引き受けていただき、とても盛り上がりました。

## これから

オリジナルの作品も増え、読みきかせが充実するとともに、町外のボランティア団体との交流も進むなど、活動の幅が広がっています。2014年度には、子どもや若者を育成する活動として、内閣府特命担当大臣表彰(チャイルド・ユースサポート章)を受章しました。受章は大きな励みになるとともに、メンバーや協力していただいた方たちへのご褒美だと思っています。今金町は「読書と作文のまち」を掲げています。乳幼児から小学生まで関わりを持つことで、子どもたちの成長を見守り、地域で子育てをする気運をこれからも高めていきたいですね。

北の★女性たちへの  
メッセージ

子どもたちや高齢者の方たちの笑顔が活力です。仲間とやり遂げる充実感とともに、「自分にとってかけがえのない場所」として楽しく活動しています。無理をしない、無理をさせないでこれからも活動し、いずれは「ババース・呆けっと」と呼ばれるまで続けたいですね。